大雪山国立公園連絡協議会　登山道維持管理部会
令和４年度登山道維持管理勉強会　議事録

- 日時：令和５年２月 24 日(木) 10:00～12:00
- 場所：上川町役場　大会議室（上川郡上川町南町 180 番地）
  ※オンライン会議システム併用
- 出席者：別添名簿のとおり

１．開会

２．趣旨説明

■　大雪山国立公園管理事務所　広野所長

・　今回の登山道維持管理勉強会は、大雪山国立公園連絡協議会の事業の一環として開催するもの。昨年度は中岳裾合平線歩道事業の、中岳温泉から中岳分岐までの区間について設計内容の意見交換を行った。今年度も一つの実例を通じて、維持管理をどう考えていくか共通認識を図りたい。

・　今回は大雪山縦走線の中で特に荒廃が進行しているヒサゴ沼周辺歩道を事例として取り上げる。これまでも白雲岳避難小屋から南の縦走線は保全対策、グレードの面からもの重要性が早いと考え、北海道と役割分担しながら順次必要なところの施工を計画している。

・　ヒサゴ沼周辺歩道は環境省で設計を行っており、今回は設計内容を一つの題材とし、今後の維持管理のあり方について皆様と意見交換をさせていただきたい。

・　大雪山には多くの登山道がある中、優先順位をつけながら特に手当が直ちに必要なところから大連協としても早く着手できればと考える。白雲岳周辺での施工が始まる中、維持管理をどう広げていくか、今後の本格的な維持管理・補修をご議論頂き、積極的な意見交換をお願いしたい。

３．（１）ヒサゴ沼周辺歩道の現状等について

■　事務局より資料１、資料２、登山道の動画を見ながら説明

（２）意見交換

■　山岳レクリエーション管理研究会　山口

・　現状の認識で所々ひっかかる。1999 年に実施した整備は利用のための整備。木道にしても化雲への階段工にしても、環境保全の視点ではなく、「今は違うんだ」と認識していただきたい。説明の中で所々「1999 年の整備で機能しているところもある」と仰っており、木道を付け足すという説明もあったが、1999 年の整備はたまたま生きているところがあっただけで、環境保全の設計とは違うという前提をみんなに共有いただき

たい。

■　北海道山岳整備、大雪山・山守隊　岡崎氏

・　今の認識はその通り。ここだけでなく、今の登山道の色々な崩れというのは原因が色々見えているが、利便性向上のための整備で、侵食原因を完全に見落とした整備をしていたので、そうではなく、崩れたところの生態系を復元させるという方法に切替えない限り、また同様に侵食が起こる。もちろん登山道だから利便のためもあるが、それ以外に周りの風景を見て、生態系をいかに復元させるかを重きに置いた方が良い。

・　1999 年に施工とあるが、実は施工後２，３年後には崩れがはじまっているのは北海道大学の先生はじめ知っている方はいた。ただ、それが気付かずに、また知らされずに、こんなに酷くなって元の地形に戻すことは不可能という状態になってから、整備しましょうとなる。どう考えてもこの部分がおかしい。侵食原因は、流水や凍結融解現象ではなく、これをしっかり記録管理してこなかった方々のシステムにある。ここの生態系を復元していく目標を定めるならば、かなり時間がかかる。やったら終わりでない。今どうなっているのか、これからどうなっていくのか、去年やった施工はどうなったのか、それをいろいろな方々と共有できる状態にしない限り、また同じ事が起こる。

・　お金があるからやると言うより、回り回ったお金というのは今後もあるのだろうから今度やるならここだよね、ということを大雪山全域で皆さんに共有してお金の使いまわしをできるようにやっていかないとダメだと思う。維持管理を含めて長い目で今回見ていただけるようなので、これを良い事例として仕組みをつくっていくべき。そのために山口氏が仰った生態系復元のための整備に利便も絡めていくという考え方は大事なこと。

■　事務局

・　山口氏が仰ることはその通りだとこちらも考えているし、岡崎氏が仰ることもこちらが目指すものとして理解している。既存の利用のための整備だったものに対して、全て撤去することが生態系として最も正しい判断ではなく、撤去することで新たな侵食を招いてしまうことも場合によってはある。敢えて撤去しない方が良いのでは、という判断も交えて再整備の計画としている。利便性向上や利用第一のための発想ではない。金的に同じ認識でいることを申し上げたい。

■　北海道大学大学院地球環境科学研究院　渡邉教授

・　山口氏、岡崎氏のご発言はごもっとも。資料には植生回復という言葉があるが、そもそもグレード５の区間に侵食防止や保護のために人員の手を加えるのは良いのかといのはコンセンサスがないと思う。グレード５の区間に木柵階段やグレーチングを入れることも、人によって考え方が違う。本来ならば入れるべきでない。でも岡崎氏が仰った

ように既に荒廃しているため、環境省がこの考え方でやろうとしている。だけど、本来は人の手を加えないことは選択肢の一つとしてある。荒廃した場所でさえ、グレード５に関しては手を付けない、そのままにしておく、というのも自然の一部だと思う。そういうところは利用休止にしてしまうか、あるいは手を加えるとしても、木柵階段のように目で見えるようなことは極力しないで、深いガリーがあるところは埋めていって、地表面は被せて人の目につかないようにする。人目に付くような整備は極力しない。先ほど撤去はしないと仰っていたが、本来は積極的にすべき。コンセンサスはとれないかもしれないが、勉強会で議論をすることと、みなさんがそれを理解した上で、今回の作業を進めていただくのが大事。

・ 「整備による積極的な管理」はとても大事なことで、それを大雪山ではずっと進めてきている。だけどそれに対して場所によっては、利用を休止することを進めたり、利用者の目に直接入らないように整備をしたりするなどの判断を絶えず天秤にかけて議論をしていく。その上で、「今回はヒサゴでは利用者の配慮、利便性、安全性ではなく、侵食防止の対応をとることにした。」というのをメンバーの間で確認していく対応しないと、今回の整備でも後々「あれで良かったのか」、と言う話にもなるし、さきほど言ったようにいろいろな選択肢があってそれを議論した上で進めないと、グレード５もグレード２でも全く同じだと困る。みなさんそれぞれお考えが違うので、お考えを共有していただけると良い。

■ 事務局

・ こちらとしても特別保護地区であり、グレード５相当であり、国立公園の中でも最も原生的な自然環境がある場所と認識している。人工物は極力避けたいし、そういう方法で考えていきたい。どのように侵食を止め、土壌を安定させ、植生を回復させるのか目的に考えると手当をしなければいけないため、必要最小限の施工に伴う人工物は必要になる。自然環境に支障のないようにするのが何よりも大切。

■ Asahidake Trail Keeper 藤氏

・ 渡邉先生の意見に近いが、結構、山は侵食と安定を長い目で見れば繰り返している。常に安定に向かっていると考えている。今の計画案に関わらず、今やられている整備は、今の形を保とうとしているように見える。例を上げると、間宮の城壁周辺が崩れたときに、テンサーで固めていると思うが、地形をこれ以上崩さない、という整備はあんまり良くないと思っており、手を加えないとは言わないが、安定に向かう手伝いの施工ができたら良いとは思う。

・ 先ほどの動画で登山道の木柵階段の脇がえぐれているが、登山道を作ったらからえぐれたのか、もともと水みちに道を作ったのか、教えてほしい。

■　事務局

・　現在までの成り立ちをフォローしてきていないので、歩いたから水みちになったのか、元々水みちなのかはわからない。

・　前段のご意見にも感謝する。不必要な手を加えると言うよりは、できるだけ今の状況が安定に向かっていけるように、現場の形に合わせていく。資料１にもあるが、「工事をやって終わり」、ではなく、メンテナンスをやっていきたい。

■　北海道大学大学院農学研究院　愛甲准教授

・　今回の資料について、前回の施工前と施工直後の写真があれば良いと思った。

・　私は 2000 年頃、ヒサゴの野営地の調査でここに頻繁に通っており、工事後のここを見て「こんなことやっちゃったのか」というのが最初の印象だった。すでに崩れはじめ、水みちもできて、元々の登山道も歩きにくくなってぬかるみもできているため、元の水みちをよけるようにして階段が作られて、歩きやすいのか、歩きにくいのかよくわからない施工だった。水みちの崩れもはじまっていて、道も広がり、それが一気に広がり、施工された階段も崩していったという印象。なので、どう元に戻すということを考えるときに、その当時を振り返えなければいけない。施工した後どこを歩かせるか、今歩いている場所を維持するのであれば果たしてそれでいいのか、という判断を聞きたい。

・　1999 年の施工後、点検や補修をされてないのか？

■　十勝総合振興局　環境生活課　村上

・　当時の状況は詳しくわからないが、維持管理の記録が残っていない。お詫びしなければならないと思う。

■　北海道大学大学院農学研究院　愛甲准教授

・　数年で機能しなくなり、そこを歩く人がいなくなった印象。同じことを繰り返すわけにはいかないので、今回やるとしてもそうなってはならない。資料１の再整備スケジュールにある令和６年度以降、「維持管理計画に基づく現場の状況に応じた各種補修を実施」はすごく重要で、維持管理計画はどういうもので、この場所だけ作るのか、補修した場所全域でメンテナンス、点検をしていくのか、伺いたい。

■　事務局

・　維持管理について、白雲岳避難小屋から五色岳までの区間に一部木道があり木道が老朽化している。昨年度、設計業務を行い、来年度、五色岳から化雲岳まで繋ぐ路線も別途設計を行いたいと考えている。

・　最も重要な主稜線、グレード５は北海道とも役割分担をして、環境省としても順次必要なところに必要な維持管理をやっていきたいと考えており、白雲岳から南に繋いでい

って、今のところはヒサゴ沼まで計画をしている。

・　この区間の維持管理をどのように計画してどんな体制を考えていけるかはまだ見えていないが、白雲岳周辺で行われている成果なども見て、協力金をどう拡大していけるか、体制をどう作っていけるかを考えることと併せて、ヒサゴ沼周辺歩道の維持管理をどうしていくかも見えてくると考えている。来年度以降、現場の施工も行いながら、体制づくりに向け相談していきたい。

■　大雪山倶楽部　森田

初歩的なことから伺いたい。今紹介のあったヒサゴ沼周辺の登山道の管理者はどこか？この工事は軽微な補修ではなく、大規模改修だと思うが、優先順位はどういう順位か？これからの維持はしっかり検討していく、という話だが、結果としてあまり考えてないようだ。維持管理はお金の問題となる。環境省から補助金等で地方交付税を活用し北海道が工事をやるのかもしれないが、維持費は、地方自治体が単費で出さないとならないが、今後の維持管理はどうか。設計は環境省でやると言うが、施行は管理者がやるのか。

・　今年もアドベンチャートラベルサミットが開催され、この手のものは利益率が高い。今は国も道も予算確保できるチャンスである。アドベンチャートラベルサミットを行うことを目的ではなく、インバウンドが来てもらうことを目的とするならば、それの投資効果を考えてやらないといけない。去年、私たちのガイド会社だけでも、８千人を案内した。環境省もカウンターを付けていると思うが、私たちが案内しているのは全て道外の来訪者。それを考えて関係行政機関は予算を確保すべき。ボランティアやクラウドファンディングも良いが、いくら頑張ってもクラウドファンディングは 300 万円程度。裾合平の木道をクラウドファンディングで直そうとなると、公費で５～６億かかるとすると、単純計算で 200 年はかかる計算となる。200 年待つのか。

■　事務局

・　管理者について。ヒサゴ沼周辺歩道の今の事業執行者は北海道だが、今回から設計施工は環境省の直轄事業として置き換えていく。設計が環境省なので、管理者も環境省になる。

・　優先度について。昨年度、中岳裾合平線の設計を行った。今年度施工に入る予定だったが、入札不調と終わったため、来年度また入札を行うこととなった。白雲岳避難小屋～五色岳の木道も昨年度設計を実施し、今年度施工の予定だったが、それ以上にヒサゴ沼周辺の侵食・荒廃状況が酷く、優先度は明らかにこちらが高いと判断し、急遽設計を行い、優先度を上げて来年度施工することとなった。

・　整備を行った後の維持管理費はゼロではなく、僅かながらも直轄路線は整備を行った後は必要最小限の維持管理はしているので、ヒサゴについても要求していきたい。一方

で、白雲岳周辺で行っている協力金を活用した補修が展開できるかはまだ不透明。環境省で考えるだけでは見えてこないため、上川地区の登山道維持管理連絡協議会や大雪山国立公園連絡協議会も含めて皆さんとどのように大雪山の優先度の高いところに協力金を活用できるのかの話し合いを続けていくことになる。

■　大雪山倶楽部　森田

・　クラファンや協力金はいくら集まるか分からず、オプションだと思う。メインの管理者の労務を果たすのが本来の筋。またコロナが始まれば来る人は減るし、寄付金は減るので、安定的な予算を確保しなければならない。立派な施設を作れば作るほど維持管理費はかかるため、グレード５の自然環境に近い形を維持するのであれば、自然の摂理で仕方ないと思うが、クラウドファンディングや協力金に頼るのはいかがなものかと思う。

■　層雲峡ビジターセンター　佐久間

・　先ほどの藤氏の質問にも関連するが、元々の登山道は水みちだったと思われる。登山道をつけたと言うより、水みちは乾いたら歩きやすいので、そこが登山道になったのだと思う。どんどんえぐれ、脇の高まりの部分にスロープのような階段をつけて、若干離れたところに道を付けたが、それがすぐに歩きにくくなったため、脇のえぐれ部分と木のブロックの間の部分を歩き始め、そこが裸地化し、また水が流れそこが崩れブロックの部分までガバッと崩れてしまったと私は考える。これから補修にするにしても、そこを考えなければならない。ドローンでの写真を見ると登山道の西側に岩塊地があるので、ここにルートを付け替えたりして、植生を横切らないような道にしたら、もう少しマシになるのでは。

■　山岳レクリエーション管理研究会　山口

・　1999 年当時の水みちについては佐久間氏の言う通りだと思う。登山道沿いに水が流れていて、そこに階段を設置したという理解。おそらく 1998～2000 年の間にそこを歩いたので覚えている。先ほど渡邉先生と藤氏が挙げられた、グレード５だから自然の崩れるままに、そのままにしたら良いというのは、私の意見と少し違う。人が歩いたところが崩れていて血を流している大雪山は、応急手当が必要だと思う。過剰整備は必要ないが、血を流している物に対して舐めておけば治るというのではなく、医者が手当をするというのが必要。整備することでグレード５じゃなくなるなら、手当が先で、グレード５でなくなっても仕方ないと思う。

■　北海道大学大学院地球環境科学研究院　渡邉教授

・　先ほどの発言は決して手を入れないようにしろと言うわけでなく、いろいろな選択肢があり、それを議論して決めたというステップが大事ということ。整備による積極的な

管理は大事なことで、この集まりはそのためにあると思う。残念ながら大雪山は傷ついたところが多く最低限の手は入れないとならない。皆さんが合意し、記録を残した上で、整備しなければいけないと思う。

■　北海道山岳整備、大雪山・山守隊　岡崎氏

・　藤氏が言われた侵食・安定を繰り返すというのは確かにその通りだが、それは長いスパン。今回起きている登山道侵食は数十年か十数年でこういう状態になってしまっていて、自然ではない状態。あまりにも酷くなったところは手の付けようがないと放棄するという考え方もあり、みんなで話し合った結果、放棄しようと決まれば自分は従うが、技術を高めるという点も含めて、利用して崩れたところを対応していくことを人間がやらない限り、自然を利用することはできなくなる。保全できる技術がある、だから利用しても構わない、というのが国立公園の基本ルールにはあるべきだと思う。色々な補修方法を考えつつ、間宮も白雲もここもそうで、やってみないとわからないことが多々ある。これからは気候変動によって数十年単位で凍土が解け出すのは確実だと思う。そのときにそれが自然なのだと考えていく選択肢や、もしかすると利用ができなくなる場所もたくさん出てくるとかと思うが、それを選択肢に入れることは大事だと思う。しかしここは利用を取りやめることは出来ないと思う。自分も利用が取りやめできるなら大きな土嚢をいくつか作って経年変化を見守っていくのでも良いが、人間が利用していく前提があるなら、利用も侵食原因の一つなので、対応できる施工をやり続けるのは必要。

・　先ほど森田氏が仰ったアドベンチャートラベルの予算を引っ張ってくるチャンスというのは大切。行政は予算確保が苦手である。全国の国立公園で上手くいっているところは商売人が入っている。ブランド化し、イメージ戦略を取り、企業を引っ張ってくる、そういう人が必ずいる。そこでお金が取れ、人が集まるのであれば行政もお金をかけられる雰囲気になる。大雪山にはそれが少ない。口では言うが、実際に行動できる人が行政の中ではいない。お金を使う段階で、そういう人を引っ張ってくるお金を使った方が良い。目先のお金はかかるが、何倍にも膨れ上がって保全に回ってくる。商売人とは言わないが、経済的なことを考えられる人は、こういうビジョンを作る上で欠かせない人だと思うので、是非そういう人を入れる計画を立てていただいたら良い。

■　Asahidake Trail Keeper 藤氏

・　手を加えない方が良いとは言っていない。利用と保護のバランスを取るための施工は絶対に必要。保全をしているつもりの施工が侵食を進めているように見える、ということを言いたい。川の工事で例えるが、川が削れないよう床止めすれば、流量が同じであれば法面が削られる。法面を強くすれば床が削られる。今はそれがされていると思う。安定に向かうのを手伝う施工が出来ればと考えている。

■　北海道山岳整備、大雪山・山守隊　岡崎氏

・　細かいところだが「資料１」６ページ左側 L=94mの右側上に裸地がある。ここは早急に止めておきたい裸地だが、ここについては今回の工事では予定はないか。去年現場を見て気がついたが、裸地の初期で土壌が残っているので、今止めればなんとかなると思える裸地だった。範囲は広くて、中にはテントを張っている人がいるかも知れないが。

■　事務局

・　今回の施工には入っていないが、現場に通われている北海道大学工藤先生からも情報をいただいたところ、昔はここにテントを張った人がいたと聞いている。今はマナーも向上し、敢えて入り込んでいる方はいないため利用の心配はしなくて良さそうだが、ここをどうしていくか、関係者間で協議したい。

■　北海道山岳整備、大雪山・山守隊　岡崎氏

・　去年はじめて見て、近々の感じではテントを張っている人はいないと思ったが、裸地になり、斜度でゆるやかに水が流れ、土壌が流失している。こうなったら、土壌流失は止まらないが、こういう部分は植生があることによって土壌が安定している。一度裸地になってしまうと、人が入らなくても、岩盤が出るまで崩れが進んでしまうかもしれない、と見えた場所。マナーが良くなって人が入らなくなったら部分的に回復するかもしれないが、全体的には土壌がなくなっていく可能性があるため、経年変化だけでもしっかり見ることが大事。

・　佐久間氏が仰っていた、別のルートにできるのなら一番それが良い。自然発生的についた道ではなく、しっかり管理できる道に変えていく、もしここがそういう前例としてやることができたら、全国の国立公園でもマネしてくる人は多い。「自然発生的に昔からついていたから、崩れても仕方がない」ではなく、管理前提の道の発想ができるなら、一番だと思う。渡邉先生が仰るように、そういうのが選択肢にあり、今回はこの選択肢を取ったという共有認識を、視覚化できるようにした方が良い。

■　北海道大学大学院農学研究院　愛甲准教授

・　別のルートを考える選択ということは同じ意見。今回もまた同じことが起きるかもしれない。以前から、なんでここが道なのかと考えていた。急激に傾斜が急になり、ヒサゴの分岐に向かってまっすぐ下りていく。それまでかなりなだらかに緩いので、もう少し手前から緩やかにジグザクにしても良いのでは。残雪期にはそうやって行くことができる。それは選択肢として残しておくべき。

・　裸地の件だが、2000 年頃に野営指定地の調査をしていた頃は、野営指定地が溢れてテントが張れなくなると、その裸地に張る現象があり、頻繁に使われていたのはその頃。

逆に聞きたいのだが、ヒサゴの野営指定地のテントを張れる場所が少なくなってきている。今回の工事でロープ柵の再整備が入っているが、東側は使わないようにするのか？工藤先生が普段張っている西側のところは石がゴロゴロしていて、張れる数が限られている。テントを張れる場所を確保しておかないと、また裸地化しているところにテントが張られてしまうようになるのでは。

■　事務局

・　今回、野営指定地そのものが設計対象になっているわけないが、密接に連携しているのは我々も認識している。今回の設計の中では、右端は積極的に使うようにしていくことは想定していないが、張れる場所が少なくなっていたり、工藤先生のテン場付近の石がゴロゴロしているところも含めて石をならしたりするなど、土木工事まではできないが、何かしら現場にある物を使って改善できないか考えたい。今後の維持管理の中でモニタリングが必要。

■　北海道大学大学院農学研究院　愛甲准教授

・　渡邉先生のところでも調査をして提案をされていたが、石がゴロゴロしているところはテントを張りにくく、最近はソロテントも増えているので、他の石が多い場所では、ベニヤ板を貸出して張らせているところもある。そうすると野営指定地内である程度の数が押さえられるので、周辺の植生を守ったり、人の数をこれ以上増やしたりしないという観点では、そういった対応もすべきである。右端の部分を使わせるのか、使わせないのか、はっきりさせた方が良い。木道をどこまで延ばすかにも関係している。ぬかるみが非常に多く、あまり快適な場所ではない。ニペソツ山の写真を撮りに行くのによく使われてはいるが、止めた方が良いと思う。

・　ヒサゴ沼区間について、「資料１」全体平面図の①は施設計画図が記載されているが、②に関しては何もしないということか。

■　事務局

・　②も６ページにまとめているので、ご参照いただきたい。

■　山岳レクリエーション管理研究会　山口

・　今の登山道線形を変えることや野営指定地の位置をずらすこと等は、山岳トイレ等検討作業部会でも言った。公園計画や借地契約にも抵触するので、極端にできないと思うが、沼ノ平の半月湖で線形を変更したように、若干の変更というのは許容できるものかお聞きしたい。

■　事務局

・　基本的には個別具体の事例ごとの判断になるが、極端に何百メートルも変える等、大幅な変更は公園計画から見直す必要があるが、何十メートルの迂回といった程度であれば大きく計画が変わるわけではないので、変更の必要性は低いと思われる。

■　北海道山岳整備、大雪山・山守隊　岡崎氏

・　設計するコンサルタントにも言っているが、維持管理は何年か続いているが、何をどう目指しているのか、わかりやすいイメージを作って、５年後や 10 年後に、こういう環境になることを目指しているという到達点を示してほしい。それを出していただけると、一般の方は非常にわかり易い。やりはじめました、来年やります、と言ってできあがったものの判断にはして欲しくない。維持管理は将来も続いて、その中でも問題は起きると思うが、目指すところはここです、というものをいろいろな方に共有したい。今回はここ直します、という設計図しかないが、維持管理でやれることも含めて、青写真があればわかりやすい。

■　事務局

・　今、お話いただいたことも含め、検討したい。

４．その他

■　山岳レクリエーション管理研究会　山口

・　今後、トイレも登山道の再整備もそうだが、コンサルタントと環境省の方で進めていただくと思うが、多分このメンバーに事前に相談いただければ良いアイディアで出てくると思う。大雪山は日本の国立公園の中でも一番取り組んでおり先進事例なので、この知見を先に相談していただいた方が、手戻りにならないと思う。

■　事務局

・　必要に応じて、皆さんが集まった場や個別にご相談させて頂く。

■　北海道大学大学院農学研究院　愛甲准教授

・　冒頭でも話したが、維持管理の計画をどこの場所で立てるかというと、まずは白雲からヒサゴまでの環境省が直轄する場所でというお話があり、まず環境省の担当される場所なので理解できる。一方、大雪山全体で、いろいろな事業執行者や未執行区間がある中で、どこに手を入れて、どこに手を入れないのかの優先順位を含めて、未執行区間の考えが入ってない。協力金の話が先ほどから出ているが、私も森田氏と同じ意見で、協力金はあくまでオプションで、基本は管理者がちゃんとしなければいけない。ただ、事業執行すらされてない区間もあり、ではどうするとなったときにはじめて登山者に利用者負担でお願いしましょうとなるのが本筋であって、全体的な議論をする時期が来

ていると思う。問題が起きているのはここだけではない。

■　事務局

・　12 月に開催した登山道維持管理部会でも今後の一元的な公園管理団体をどう考えていくかという議論も進んできていると思うので、今仰ったことはまさにこの後の大雪山全体の維持管理の話になっていくため、同時並行で一緒になってやっていきたい。

■　北海道山岳整備、大雪山・山守隊　岡崎氏

・　視野を広げた意見をお伝えする。管理者がお金を出すと仰るが正直、税収が少なくなる一方、山のレクリエーションの道に対してお金を出すという視野はできなくなると思う。アドベンチャートラベルなどで少しはできるが、一部の人のためにはできなくなる。登山者の利便のための整備ではなく、後生に残していく生態系を存続させるためにお金が必要だという理解を、登山者だけでなく一般の人にも発信していくことをやって、はじめて国民のための自然になる。今は登山者の利便のため、歩きやすいためだと、登山者のためのお金にしかならない。そこを、生態系は日本や世界にとって、なくてはならないものだからお金をかけてでも保全していくべき貴重なものなのだと、いろんな視野で宣伝をしてお金を確保することは大事。このため、先ほども言ったが、経済的な人を呼び込めというのはいろいろな視野を広げる上では必要。皆さんもできれば、歩きやすい、ぬかるみが嫌い、安心安全、というレベルの話ではなく、生態系が自分たちに与えてくれる恩恵をもう少し広い視野で見て、いろいろな人にアプローチすることがこれからは必要だし、次なるお金が集まってこない。アドベンチャートラベルはたかが知れている。税金を増やす、環境省職員を増やす、そう考えると地域全体で発信していかなくてはならないと考える。

■　事務局

・　登山者が登山を楽しむだけの今までの公園利用というよりは、様々な意味での生態系の価値を実感していただき、実感いただいた方から賛同いただき、広く協力していただいたり、仕組みに組み込んでいったりするというのが、これから重要な大雪山の方向性だと思う。引き続き具体化に向け進めていきたい。

■　山樂舎 BEAR　佐久間

・　視野の狭い意見かもしれないが、場合によっては５年間立ち入り禁止にする等、尾瀬の至仏山で以前やったみたいにそのよう措置も必要になってくると思う。選択肢に是非入れてもらいたい。５年ではなく２年でも良いか、そのような場所も検討願いたい。

４．閉会